

平成艸紙



おりおりの記

人は進化しない？

公益財団法人 日本証券経済研究所
理事長

東 英治

二十余年前、証券会社で株式相場の戦略を練る投資情報部に異動した頃の話。それまで企業アナリストの経験しかなかった私は、初めてチャートストと相場の先行きを議論する場面に出くわした。チャートストとは、過去の株価動向のグラフ（罫線）などを基に、将来の株価を予測する専門家である。確かに罫線のローソク足は、江戸時代に日本が生み出した世界的発明であり重宝する。しかし所詮、過去の記録である。

投資情報部では、毎週、毎月、毎半期ごとに、それぞれ数期間単位での、将来の株式相場を議論する。ある日、私はチャートストにこう聞いた。「過去の株価だけで、どうして将来が予想できるのだ。時代背景が違えば、経済環境も過去と同じことなどない。」

企業分析でも、当然過去の財務分析などで収益構造、経営戦略、企業体質などを把握する。しかし、それだけでは予想などできない。経済・業界環境等の予測が重要となる。業績予想という数字で、企業の将来の姿を表現するアナリストからすると、過去の株価だけから将来を予測するチャートストの存在意義が、理解できないというのが本音であった。

しかも時は、ジャパン・アズ・ナンバーワンである。「ザ・セイホ」が英語となり、日本経済・企業は新たな飛躍のステージに入った、と信じていた。過去が当てはまるとは、とても思えぬ時代であった。

もっとも、企業アナリストとして、企業の将来を的確に予測できていたかという点では、はなはだ心もとない。相場の運行指標などと揶揄されないように、努力するのが精一杯ではあった。

先の質問に対し、チャートストはこう言った。「あなたが、百メートルの断崖絶壁の上に立って、そこから下を見たらどう思いますか。」

「それは、縮み上がるほど怖しさ。」

「一万年前の古代人も、同じです。」

初めて相場の本質の一端を感じた瞬間であった。なぜ相場は繰り返すのか。それは人の「喜怒哀楽」が、変わらないからだ。バブルが繰り返しているのも、人間は容易に進化しないからであろう。歴史に学ぶことの重要さを、肝に銘じた時であった。相場は、人が作るもの。市場は、世界中の人の「喜怒哀楽」の激戦地である。

歴史に学ぶ大切さを肝に銘じたものの、その後二十余年、相場想定がよりの確になったという状況証拠は、残念ながらいままでのところない。

